

土筆と菜の花

★鳥取県 千代川水系
☆八東川

出張の行き道で国道沿いに川を見下ろすと、自然と娘が幼少の頃に菜の花の咲く土手で見せられたお遊戯を思い出し、思わず笑いがこみ上げてきた。

「なんでやる?・・・」

何故だかこの川沿いを走ると、その昔イワナやヤマメを釣り上げた川の記憶は掻き消され、以前家族を伴い赴任した頃の記憶が蘇り、必ず童謡が連想される。逆に童謡を聴くと脳裏に土筆の土手や菜の花の川原・・・この川の景色が現れ、何とも不思議な川となっている。

八東川・・・山陰若桜地方を流れ、鳥取市で日本海に注ぐ千代川の大支流である。

釣りと言えば、今は琵琶湖に注ぐ河川によく出かけるが、昔は余り興味がなかった。

意味もなく淀川の水系を嫌い、滋賀と言えば唯一日本海に注ぐ天増川しか知らず、その頃の河川番付は・・・東横綱「足羽川」・西横綱「岸田川」、東西小結「美山川」・・・後の河川は西方面は前頭、東方面はとうとう天増川を見限って番

外という感じだった。

従って、毛色を変える釣り場としては岸田川に行き着くまでの兵庫県の河川や鳥取県東部の河川となり、丹山川水系、矢田川などの日本海に注ぐ河川はもちろん、瀬戸内に注ぐ揖保川上流域や千種川などとなる。

それなりにあちこちを叩いて回ったが、どこもかしこもパッとせず、高速に乗って出向くのが、大差ないか逆にかつて見えた記憶がある。

しかし、直後に前頭から小結へ昇格して西関脇に躍り出た河川が、この「八東川」だった。

何といっても岸田川や揖保川や千種川の源流域の頂きから反対側に流れ出す渓谷が集まった河川であることも興味を惹いた。

私都川・細見川・来見野川・吉川川・名荷谷・加地川そして本流・・・中でも頂きの反対側に三室渓谷(千種川)が流れる加地川と、岸田川と水を別ける来見野川がお気に入り、当時はドライフライ一辺倒だった私にもイワナを主体にヤマメも混じり、それなりに楽しめた。

金曜の夜中まで仕事を終えた後、職場で毛鉤を巻き、そのまま歩いて夜明けと共に入渓、一泊野宿して日曜の夜に戻ると言うスタイルで通っていた。

そんな中で結婚して子供も生まれ、泊まりが

難しくなり始めた頃、鳥取に転勤が決まり、一家で関西を離れて見知らぬ山陰に移り住んだ。

気が付くとそこは西横綱「岸田川」まで一時間も掛からず、西関脇「八東川」に至っては庭先を流れる川・・・と言う絶好のロケーションだった。

もう、これぞ神の思召しと言う状況に舞い上がったのは言うまでもない。

しかし、現実はずう甘くはなかった。2歳と生まれたての二人の娘を抱え、家内と見知らぬ土地に赴いた状況では釣りどころではない。丸一日などはとんでもなく、行けても夜明けからの午前中で午後からは家族を連れて買い物や公園通い・・・毛鉤を巻くことも封印され、結局2年間で指折り数える程しか行けなかった。

当然、この様な状況になると、手堅く岸田川の放流釣場となってしまう、八東川は庭先近くを流れる夕夕の川になり下がり、とうとう赴任中の2年間で一度も竿を出せなかった。

しかし、露のトウが見たいと言われると、かつて野宿した川原に出向き、土筆を探りに土手に行き、満開の菜の花の川原を歩き、山に行くとうと「ふるさとの森」と言う渓谷沿いの公園に行く・・・そこには何時も八東川が流れ、行き帰りの車中にはカーステレオから童謡が流れていた。

川沿いを走ると時折釣り師が道端を歩いている。まれにフライフィッシャーもが見受けられた。「何処見てんの？・・・事故るでえー！」・・・と助手席の家に言われて我に返る。

その時も車中には童謡が流れていた。

そしてかつての釣り場イメージは完全に消えうせ、いつしか童謡をバックミュージックに景色として飛び込んでくるタダの川となっていた。

■八東川について・・・その後・・・

で・・・鳥取から大阪に帰ってからどうなったか？

かつての西の関脇は童謡が聞こえると土筆の土手と菜の花の川原を思い出す「タダの川」のままである。その景色には家内と手をつないだ幼少の頃の娘達の姿があり、それはそれでひとつの思い出でもあるが・・・

「今までなあ・・・まあソバに住んどって、いっぺんも竿出してへんねんぞあ・・・誰が行くか！あほくナー！・・・ホンマ・・・日帰りでも微妙に遠いし金かかるし！・・・ましてや、なんで庭先で野宿せなあかんねん！」・・・というレジスタンスにも似た感情に支配され無理からに西を封印した。

西の横綱「岸田川」でさえ、大阪に戻って暫くは足が向かなかった。

その後も「去年まで・・・」「おとこしまで・・・」「ちょっと前まで・・・」を積み重ね、この「あほくナー」が今に至っている。

ところが結果的に大阪に戻ると小結「美山川」だけでは食果に喘ぐようになり、やむなく東に目が向いて、結果的に愛知川を皮切りに安曇川・野洲川と琵琶湖周りに足が向く様になっている。

しかし、気が付くともう十数年の月日が流れている。そろそろ「タダの川」を払拭して西の関脇を復活させても良い頃かもしれない。

八東川・・4月は水温が低く、5月に急上昇し、田植えのシーズンを迎えるとかかなり湯水気味の溪相であったが、今から思えば、非常に入渓しやすい流れであったと記憶する。

本当に最近である・・・漸く思い出せる様になってきた。

本流でカゲロウのスーパーハッチに遭遇しカワムツに混じって飛んで出たイワナ、吉川川の淵上でヘッド&テールで出たヤマメ、ミッジを知らず雨の様なライズに向かい必死で投げるサメの散々無視された来見野のプール・・・小さなポケットから次々と出た諸鹿上流のイワナ・・・尺超えは釣れなかったが、どれもこれも23〜25cmの型揃いで、あの頃の倉粗な毛鉤でも充分に楽しめた。今ならもう少しマシに釣っ

て見せる自信はある。・・・・・と想っている（・・・と思いたい）。

果たして昔のまま関脇の地位で頑張っているだろうか？それ以上に大関昇格であってほしいが・・・それともとくに番外に陥落しているのだろうか？

久しぶりに出向くか？それとも「土筆と菜の花」・・・タダの川」のまま心の片隅にそっとしておくか？

思案しても答えが出せず、この先どうなるかは今の私にもわからない。

2007年 10月